

子どもの生活のまわりには、いろいろと頭を使うことが取り巻いています。たとえばお金を数えるとか、お母さんのお手伝いをするとか、いくらでも家庭の中にあるわけです。しかし家の手伝いなんかさせると勉強の妨げになるというふうに考えてしまって、親はただ勉強しなさい、と机の前に座らせてしまっているのです。勉強だけさせていれば賢くなると、勘違いしてしまっているわけです。

子どもというのは机の前で賢くなるよりも、生活の中で親の手伝いをしたりしたほうが実はずっと頭を使うことになるのです。成長の段階として大事なのです。もし子どもに何か学習させたいのであれば、文字が読めて本を読めるというふうにしてやればいいわけです。

たとえば、毎日来る新聞の中から自分の知っている字を見つけ出させたりするほうが、はるかに頭の働きをよくするのです。

ところが、何か問題をやらせないと学習にならないと思っているわけです。机の前に座ってこういう問題を実際にやっていないと頭がよくなれないと考えているのは、大変な誤りです。子どもを選抜する学校側にとっても、こういうテストで子どもの能力を判断して入学させても、果たして望むような子どもがとれるかどうかという疑問があります。つまりこうい

う問題は解けても、実際には家でお使いもできない、そういう子どもばかり集めても、学校だって持て余すだろうと思うわけです。

もちろんこうした問題が解けるという能力も、まったく意味のないことではないと思います。頭のトレーニングをするということは、それなりにムダではないでしょう。しかしこのような問題で学校側が子どもを選ぶとすると、問題を事前に準備して訓練している子どもだけが入学できて、そうでない子はいれないということになります。